広大医誌，53（2-4）
41～44，平17・8月（2005）

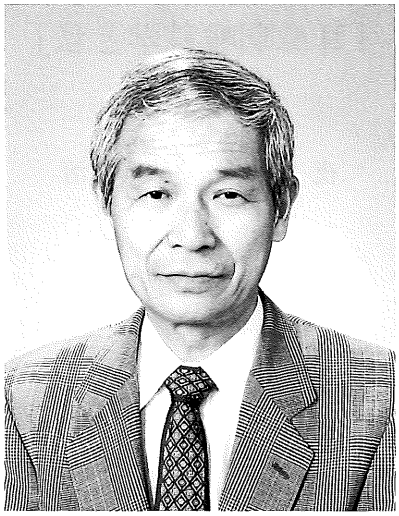
退 任 記 念 講 演

「耳鼻咽喉科学と私」

夜　陣　紘　治

広島大学大学院医歯薬学総合研究科
展開医科学専攻病態制御医科学講座
耳鼻咽喉科学・頭頸部外科学教授

平成17年3月2日
（於：広島大学医学部第5講義室）



夜陣　紘治　教授　略歴

昭和17年	広島県に生まれる
昭和42年	広島大学医学部医学科卒業
昭和42年	インターン
昭和43年	広島大学医学部耳鼻咽喉科入局
昭和48年	双三中央病院耳鼻咽喉科医長
昭和52年	医学博士（広島大学）
昭和53年	西ドイツ・ハノーファー医科大学（レーンハルト教授）留学
昭和54年	帰国
昭和55年	広島大学医学部附属病院　助手
昭和55年	広島大学医学部附属病院　講師
昭和57年	広島大学医学部　助教授
平成３年	厚生連廣島総合病院耳鼻咽喉科部長
平成４年	広島赤十字・原爆病院耳鼻咽喉科部長
平成５年	広島大学医学部　教授
平成11年	上海医科大学客員教授（～平成14年）
平成14年	広島大学大学院医歯薬学総合研究科　教授
平成16年	ドイツ耳鼻咽喉科学会名誉会員

主な学会役員など
日本耳鼻咽喉科学会理事

日本鼻科学会理事，理事長
日本気管食道科学会理事
耳鼻咽喉科臨床学会常任運営委員
日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会理事，監事
日本口腔・咽頭科学会理事
日本喉頭科学会理事
日本頭頸部外科学会理事，監事

文部省学術審議会専門委員（平成11年度）
日本学術振興会科学研究費委員会審査委員（平成14・15年度）

主催全国学会など
平成11年３月　第11回日本喉頭科学会
平成12年11月　第51回日本気管食道科学会
平成13年５月　宿題報告（於・第102回日本耳鼻咽喉科学会総会）
「慢性副鼻腔炎の病態と治療 ―粘膜・骨病変の視点から―」
平成14年９月　第32回日本耳鼻咽喉科感染症研究会
平成14年９月　第26回日本医用エアロゾル研究会
平成14年９月　第41回日本鼻科学会
平成16年５月　第105回日本耳鼻咽喉科学会総会

主な学内での活動
平成10年４月～平成12年３月　手術部部長併任
平成10年４月～平成12年３月　動物実験施設施設長併任

主な地域での活動
広島県医師会代議員
広島県地域保健対策協議会委員長
広島県社会保険診療報酬請求書審査委員
広島市住まいの衛生対策検討委員会委員長
（財）土谷記念医学振興基金理事

［講演要旨］

私の臨床経験の場は以下の如くですが，それぞれの場で経験させていただいた様々な症例を通じて，臨床医としての心構えを教えていただきました。

本講演では，その要旨を述べました。

１．これまでの臨床経験の場

広島大学時代　1968年～1973年
双三中央病院時代　1973年～1977年
西独時代　1978年～1979年
広島大学時代　1980年～1991年
厚生連廣島総合病院時代　1991年～1992年

広島赤十字・原爆病院時代　1992年～1993年
広島大学時代　1993年～2005年

2．広島大学時代　1968年～1973年
【恩師，黒住静之教授の思い出】
先生は大変熱心な方で，いろいろな Tool を用いて学生の講義をなさっていました。例えば，当時の20円切手の「こぶとりじいさん」の絵を示して耳下腺腫瘍の講義を説明したり，男性用化粧品の宣伝に出ている俳優の顔を使って外傷性斜鼻を説明するなど，様々な方法を駆使していらっしゃいました。後年，小生が講義する時に大変勉強になりました。

3．双三中央病院時代　1973年～1977年
【記録にとどめることの大切さと，頸部腫脹診断の困難さ】
重症の顔面外傷で眼球摘出をした患者さんから，後に不平を言われたことがありますが，当時の写真を見ていただき納得していただくなど，この4年間は極めて多くの症例を経験し，後の耳鼻科臨床医としての基礎を作っていただきました。

4．西独時代　1978年～1979年
【欧米に多い疾患の経験と，契約書の重要性について】
2年間と短期間でしたが，我が国に少なく欧米に多い疾患を経験いたしました。また，手術承諾書の契約書としての重要性なども教えられました。

5．広島大学時代　1980年～1991年
【他科との連携が必要な症例の提示】
この11年間は，大学病院でなくては余り経験できないであろう症例，特に，耳鼻科単独ではなく，血液疾患・皮膚疾患など，関連各科の協力無しでは治癒し得ない症例を数多く経験させていただきました。

6．厚生連廣島総合病院時代　1991年～1992年
【他科との連携が必要な症例の提示】
この時代も他科との連携が重要なことを学びました。

7．広島赤十字・原爆病院時代　1992年～1993年
【患者さんそれぞれに人生観があり，医師の論理は必ずしも通用しないこと】
1年弱でありましたが，患者さんの人生観には必ずしも医者の論理は通用しないこと，個々の患者さんの社会的背景を考慮することの必要性を教えられました。

8．広島大学時代　1993年～2005年
【以前に手術した患者さんの再発例の経験】
関連病院で治療した患者さんが治癒に至らず再発し，三度目の大学赴任に伴い大学で治療しなければならないことが多々あり，疾患を完治させることの重要性を改めて教えられました。

以上について，それぞれの症例を提示しながら説明を加えました。
時・場所は異なりますが，その経験を通して，常に今与えられたことを誠実に真摯に，しかし，自信を持って治療することが重要であることを学ばせていただきました。